

## 歴史地理学研究と経験的時間

渡 邊 秀 一 \*

### I. はじめに

本稿の目的は、歴史地理学研究に経験的時間の概念を導入するための論理的基礎をかたちづくることである。その際、検討の出発点とするのは1971年に発表されたHugh C. Princeの“Three realms of historical geography”<sup>1)</sup>(以下、1971論文と表記)である。ただ、1971論文にはその原型ともいえる1969年の論文2編、“The Future of the Past”<sup>2)</sup>、“Progress in historical geography”<sup>3)</sup>がある。そこで、この2編も適宜参照する。

1971論文は英語圏を中心とした既往の歴史地理学研究の展開と、将来への展望を視野に入れてreal worlds(実在する世界)、imagined worlds(認識された世界)、abstract worlds(抽象化された世界)の3領域に歴史地理学研究を系統だてたことで知られている。日本では1977年に菊地俊夫がその内容を紹介し<sup>4)</sup>、有蘭正一郎らが研究の基本的枠組みとして用いてきた<sup>5)</sup>。

しかし、プリンスが示した3領域の根底にstatics、change、processという時間に関わる問題があることはあまり意識されていない。そこで本稿では、菊地による紹介との重

複を避けながら、1971論文の概要を確認し、関係論文を含めて時間論的な検討を行ってその課題を示し、最後にabstract worldsに対してreal worlds、imagined worldsからなる経験的世界における時間の導入についてマクタガート(J. E. Mactaggart)の時間論を参照して検討し、経験的世界におけるプロセス研究の可能性をさぐっていく。

### II. プリンス 1971 論文の概要

#### (1) 1971 論文の構成

表1は1971論文の章・節を一覧にしたものである。各節には項が設けられているが、必要に応じて本文中で紹介することとし、ここでは省略した。プリンスは1971論文冒頭の“Three realms of historical geography”において過去に実在した世界の地理、あるいは数多くの地域における過去の地理を主要な研究対象としてきた歴史地理学に「研究の幅広い展望を開き、過去の知識への新しいアプローチを示し、またそれらの研究がどれほど歴史地理学者以外の専門家の研究の拡大につながる可能性があるかを示唆すること」<sup>6)</sup>が当該論文の目的であると明言している。過去

\* 佛教大学歴史学部歴史文化学科

キーワード：歴史地理学の3領域、マクタガートの時間論、経験的時間、歴史的現在

Key words : Three Realms of Historical Geography, McTaggart's Time Theory, Empirical Time, Historical Present

第1表 プリンズ 1971 論文の構成

序文	
I	Real worlds of the past 前文 1 Past geographies 2 Geographical change 3 Processes of change
II	Imagined worlds in the past 前文 1 Reading the historical record 2 Historical imagination 3 Value orientations 4 Cultural appraisals 5 Worlds we have lived in
III	Abstract worlds of the past 前文 1 Patterns of spatial interaction 2 Deterministic models of process 3 Probabilistic models of process
IV	Acknowledgements
V	References

に実在した世界の地理、あるいは数多くの地域の過去の地理とは、3領域のうちの real worlds of the past を指している。したがって、新しいアプローチとは残る2領域である。

もちろん imagined worlds の歴史地理学研究がここから始まったということではない。第II章においてプリンズは20世紀前半の論考数編のほか、1950年代から60年代にかけての研究成果について言及しており、一定の研究蓄積がすでにある状況で認識論的研究の必要性を強く主張したと理解すべきであろう。それに対して、abstract worlds の研究は、プリンズ等の言葉を使えば、ハーベイ (D. Harvey) の指摘を契機として必要性が強く認識された領域である<sup>7)</sup>。abstract worlds は、いわゆる地理学における計量革命の流れに歴史地理学も対応を迫られたものである。以上のように、表1のI～IIIは、ほぼ歴史地理学

研究の展開と1960年代における地理学の研究動向を踏まえたものになっていた。

1971論文の第I章は3節で構成され、そのうち第1節は、記載順に“Geohistoire、Urlandschaften、Static cross-section、Sources and reconstructions、Narratives of change”の5項で構成されている。第1・第2項は20世紀第1四半期、第3項は20世紀第2四半期の研究を、第4および第5項では20世紀第2・3四半期の研究を取り上げている。それらは基本的に過去の地理的状况(環境)に関する復元的研究で、第3項からは「静態的な時の断面」研究から「変化」、さらに「プロセス」研究への展開を視野に入れた叙述方法に関する記述になっている。第2節はタイトルからその内容を理解することが難しいが、ダービー (H. C. Darby) は地理的变化を「時間の推移を通して見た人間と土地の関係の変化」と規定している<sup>8)</sup>。ただ、プリンズが第2節で着目していることは、人間と土地との関係の変化ではなく、変化を叙述する方法である。そのことは、第1節“Narratives of change”をうけて記述された第2節の項が“Sequent occupance、Evolutionary succession、Episodic change、Frontier hypothesis”などであることから明らかである。また第3節では、歴史地理学におけるプロセス研究に関する知識は初歩的な段階にあり、歴史地理学に関連するプロセス研究の進歩は行動科学者と社会科学者らの努力に依存することが述べられている。行動科学者と社会科学者らの努力とは第III章に記述された内容を指していると理解してよからう。

第II章では過去のある時代・時期の同時代の人たちの眼を通して見た世界、そして彼らが観察したものへの評価に関する研究を取

り上げている。第1節は“Reading maps、Translating dead language、Words and culture”の3項で構成され、古文書・古記録の翻訳や古地図の読解といった史料（資料）論的な議論を行ったうえで、それらを当時の文化的文脈において理解する必要性を強調している。第2節は、“Reconstructing perceived landscape、Geosophy、Mirrors for the times、Strange and alien worlds”の4項で構成され、過去の地理的環境に作用する個人的価値観や文化的な評価基準が時代・地域によって異なり、地理的環境に対する認識が現代のそれと大きく異なること（第3・4節）を強調している。

第Ⅲ章は数学的モデルを用いた地理的事象のプロセス研究をまとめた章である。第1節“Patterns of spatial interaction”は過去の時の断面研究に対応する理論的アプローチを、第2・3節でプロセス研究の可能性について決定論的モデル、確率論的モデルの研究事例を紹介している。なかでも興味深いことはプリンスがF. Lukermannの文章を引用したことである。そこには、すべての出来事は引き起こされたが決定されておらず、法則的ではないため、個々の出来事と場所の説明は経験的説明になるが、個々の出来事は相互に独立した因果系列の偶然の交差でのみ説明でき、同じような出来事全体の中の個々は観測された頻度という点で偶然的であり法則的である、と述べられている<sup>9)</sup>。

### (2) 3領域の関係

1971論文における3領域の設定はプリンスの独創ではなく、1960年代末に“the real world、the perceived world、theoretical framework”<sup>10)</sup> や“past geography、perception of the past、models in historical geography”<sup>11)</sup>

などと表現されていた。1971論文等に記述された3領域の内容および互いの関わりをまとめると、以下のようになる。

- ① real worlds は実在的世界の客観的な再構築を目指す領域で<sup>12)</sup>、特定の出来事の年代記やその後の出来事の記録を提供する<sup>13)</sup>。しかし、「なぜ (why)」と問われると、過去の世界に生きた人々の動機、態度、好み、偏見だけでなく、仕事や行為も調べる必要があり、答えることができない<sup>14)</sup>。
- ② imagined worlds は過去の世界に生きた人々の人間の動機、態度、好みなどの主観的世界を取り扱う領域であり<sup>15)</sup>、過去の世界がどのように認識され、それらを変更する決定がどのように行われたかについての洞察を提供する<sup>16)</sup>。
- ③ real worlds、imagined worlds は、どちらも現象が空間でどのように組織化されたのか、どのように機能したのか、ある状態から別の状態にどのように変化したのかを理解することはできない<sup>17)</sup>。
- ④ abstract worlds は、文字、数字、記号、シンボルを用いて存在しない抽象的な世界 (non-existent, abstract world) を作成し、事実の相互関係を理解しようとする領域である<sup>18)</sup>。

①は過去の地理的事実、地理的環境に関する研究である。それを理解するためには過去の地理的環境に加えられた人間の営為を明らかにする必要があるというのが②である。②については、「過去の人々の地理的観念」や「過去の社会や個人の態度や目的、その目的の達成度」を踏まえる必要があるとも述べられている<sup>19)</sup>。しかし、real worlds、imagined worldsの研究では「どのように (how)」と

いう点は明らかにならず (③)、その間に答える領域が abstract worlds である (④)、というのがプリンスらの考えである。

上記の記述から明らかなように、real worlds と imagined worlds は「why」すなわち因果的に関係づけられ、抽象的世界に対してともに経験的世界をかたちづくるものとしても関係づけられている。他方で、real worlds と abstract worlds が地理的事実に関する具象と抽象、また how という問いとその回答という関係に位置づけられている。ここに、abstract worlds に対する imagined worlds の微妙な位置づけがあらわれている。

### III. 歴史地理学 3 領域における時間

#### (1) 観念的な空間・時間概念

地理学における空間概念に言及した著述は少なからずみられる。しかし、他の地理学の諸分野に比べて歴史地理学では時間をはるかに重要な意味をもっているにもかかわらず、時間概念を検討した著述はほとんどなかったと言ってよい。地理学における空間概念は絶対空間と相対空間で語られることが多い。それに従えば、時間概念についても菊地俊夫のように絶対時間と相対時間という枠組みが設定できよう<sup>20)</sup>。

ニュートンの絶対空間・絶対時間があらゆる現象・物体から独立した観念的な空間・時間であることはよく知られている。その絶対空間・絶対時間に対して相対空間・相対時間には空間・時間の絶対性を否定したり、それを相対化したりする多様な解釈があって整理が困難に思える<sup>21)</sup>。しかし、相対空間・相対時間として挙げたものの多くは、ニュートンの絶対空間・絶対時間とは次元の異なる

ものである。これまで地理学者たちが言及してきた範囲に限れば、ニュートンの絶対空間・絶対時間に対置できるのは、ライプニッツ・カントの空間・時間概念であろう。

ライプニッツの空間・時間概念は一般的に「関係」と表現されているが、ライプニッツ自身はそのように記述していない。ライプニッツにおける空間は「可能的な共実在の秩序」であり、時間は「可能的な継起の秩序」<sup>22)</sup>、「存在しないものの可能性の順序」<sup>23)</sup>である。共実在とは複数の物体が同時に実在することで、その秩序とはライプニッツの言葉で言えば「位置、距離」である<sup>24)</sup>。そして、ライプニッツは共実在の相互関係を「場所」、その総体を「空間」と呼んでいる<sup>25)</sup>。また、継起とは時間が連続的であること、その秩序とは「前後関係」<sup>26)</sup>である。ここで注意すべきことは「可能的な」という表現が空間にあって場所にはないことである。可能的とは字句的には実在できるという意味であるが、実質的には実在ではない状態を指している。すなわち、「可能的な」はすべての物体・現象の「非実在」を意味している。この論理が時間にも当てはまることは明らかで、「可能的な継起」と規定された概念としての時間もまた不在なのである。

また、ライプニッツは場所について複数の事物が同時に存在するのを観察し、そこにある共実在の秩序が存在するのを見いだすとも記述している<sup>27)</sup>。ここから「場所」概念には複数の事物とそれらを観察し見いだすという行為の主体の存在を想定することができるが、空間はそれ未満であることから、ライプニッツは空間・時間を人間の認識上の作用と考えていたことが推定でき、その点で空間・時間をアプリオリな直観の形式としたカント

と類似的である。ニュートンの絶対空間・絶対時間の概念だけでなく、ライプニッツ・カントの空間・時間概念も観念としての空間・時間である。

## (2) 時間論的にみた歴史地理学の3領域

しかし、歴史地理学を含めて地理学の主たる対象は多種多様な事物・現象が生成し、消滅する地表空間の具象的な世界である。その変化やプロセスを考えようとするとき必要なのは、観念的・非実在的な空間・時間概念ではない。

1971論文を時間に関わる表現を用いて概観すると、static → change → processと展開している。第I章では主にstaticおよびchangeが用いられ、第III章ではprocessが用いられている。また、第III章ではprocess以外の時間に関する表現はほとんどない。それに対して、第II章ではchangeやprocessを含めて時間に関わる表現が極めて少ない。

以上の3語のほかにも第I章を中心に、moment、instant、contemporary、time continuumなどの表現がある。Momentは“at some moment in the past, at particular moments in time”などと使われ、instantも“a single instant in time, at the unique instants”とよく似た使われ方をしていいる。momentには瞬間の意味もあるが、instantとの使い分けから、一定の継続する時間・時期の意味で理解する方が適切な場合もあろう。Contemporaryは文脈に依存して時代・時期を設定し、同時性を表現する語であるが、“the past held by contemporary or by later observes, past worlds seen through the eyes of contemporaries”などの用例がある。“at the same time”も少数ながら見いだせる。これらも複数の出来事の同時性を表現したもので

ある。特定の時間の指定、同時性のほかに時間の連続性(継起)を表現した句として“time continuum”や“the passage of time”、“through time”が用いられているが、successiveも時間の連続性(継起)を表現しているとみなすことができる。

しかし、1971論文を執筆する時点におけるプリンスの時間理解が分かる記述は極めて少ない。そこでプリンスが1978に発表した“Time and Historical Geography”<sup>28)</sup>(以下、1978論文と表記)を取り上げる。当該論文の“Timing as a problem in geographical theory”(①・②・③, pp. 17-19.)、“Time and space dimensions”(④・⑤, pp. 19-21.)、“Time as change”(⑥, pp. 21-23.)、および“development series”(⑦, pp. 23-25.)の各項に以下のような記述がある。

- ① The twin notions that time passes in an unceasing stream from an infinite past to an eternal future, and that history never repeats itself..... (時間は無限の過去から永遠の未来へと絶え間なく流れ、その歴史は決して繰り返されないという二つの概念は…)
- ② If time is visualized as a linear progression, the same span of time cannot be experienced or used more than once, and the same place cannot be visited more than once. Each experience is separate and each visit is a new event, and the place of a new event is not quite the same as the place of any previous or of any subsequent event. (時間が直線的な進行として視覚化されるならば、同じ期間を複数回体験したり使用したりすることはできず、また同じ

場所を複数回訪問することもできない。それぞれの体験は別々であり、それぞれの訪問は新しい出来事であり、新しい出来事の場所は前の出来事あるいは後続の出来事の場所とまったく同じということはない。）

- ③ An inference is drawn post hoc propter hoc that later events are caused by earlier events.

（後の出来事は前の出来事によって引き起こされるという推論が事後的に導き出される。）

- ④ time is unidirectional and irreversible..... a sequence of events in time cannot be reversed. We cannot move back into the past, and we cannot experience the future (Smart 1964, p. 20).

（時間は一方向性で不可逆的である。…時間内の一連の出来事を元に戻すことはできない。われわれは過去に戻ることも、未来を体験することもできない (Smart 1964, p. 20)。）

- ⑤ The future is beyond our realm of normal experience and the past is neither entirely disposable nor wholly recoverable. The immediate present is already vanishing into an obscure past of an unknown future. (未来は私たちの通常の経験の領域を超えており、過去は全く自由に使うことができず、完全に取り戻すことができるものでもない。瞬時に過ぎていく現在は、未知なる未来を不明瞭な過去の中にもう消しきっている。)

- ⑥ In the stillness of the night the passage of time is not uneventful.

（夜の静けさ（静止）の中で、時間は何

の変化もなく経過しているのではない。)

- ⑦ To know the future, we should have to anticipate the finding of knowledge as yet unknown. Clearly, this is impossible.

（未来を知るためには、われわれは未知の知識の発見を予測する必要がある。明らかに、これは不可能である。)

①は④の時間一方向性、不可逆性に基づいており、歴史あるいは歴史的な出来事の一回性は広く受け入れられていると言ってよい。②は①を受けた記述で、さらに出来事の場所という空間に関わる記述が続くが、時間に関わる記述とあわせて特定の時間・場所で起きた出来事の一回性を肯定的に記述している点で重要である。

また、②の「時間が直線的な進行として視覚化されている」こと、つまり時間を直線という図形で類比的に表現することも広く受け入れられてきたし、時代をさかのぼれば直線以外のさまざまな図形で時間の連続性が表現されてきたことも事実である<sup>29)</sup>。しかし、時間の図形化は時間の経過を示す便利な道具になったものの、大きな誤解を招いてきた。それは、直線を点に分解し、一つ一つの点を瞬間と考えること、時間を点の連続、つまり瞬間の連続と理解することなどがそれである。プリンス 1971 論文では「過去の真の時の断面が描くことができるのは、ある瞬間だけである。」<sup>30)</sup> と言い、また時間の連続性を再現するために提案された等間隔の時の断面の連鎖について、変化の基本的な説明は静止像で語るができるが、それは外面的な類似、らしさを表すだけで、変化を説明するものではないと述べている<sup>31)</sup>。プリンスは、椅子取りゲームを例に、物事がどのようにして現在

の場所にあるのか、または特定の時間にどのようなようになっていたのかを知るには、変化、発達、動きを生み出す諸要因の作用を研究することが必要だと述べている<sup>32)</sup>。瞬間を点と類比的にとらえるならば、これは妥当な批判であろう。なぜなら、直線から分離された点(瞬間)はその位置にとどまるだけで、次の点(瞬間)への移行を表していないからである。

③は時間を出来事の前後関係と理解する立場であり、ライブニットの「場所」に対応する時間の考え方がその根底にある<sup>33)</sup>。プリンスが言う前後関係は経験的世界において生成消滅する諸事象の前後関係である。一方で、経験的世界の時間には過去・現在・未来という時間系列がある。諸事象の前後関係を仮に客観的な時間と呼べば、過去・現在・未来の系列は主観的時間ということができ、第Ⅱ章において取り上げられるべき時間である。しかし、第Ⅱ章には時間に関わる記述は少なく、敢えて言えば contemporary が第Ⅱ章を代表する語句といえようが、それは文脈に依存しつつ出来事を特定の時代・時期に固定化した表現で、時間の連続性を表現することはない。

プリンスが言う「現在」とは、歴史的現在という語を除けば、プリンス自身の現在か、特定の認識主体のない一般化した現在である(前掲①、④、⑤、⑦)。その中で⑤の文章は二つの点で注目される。その一つは、過去・現在・未来という時間系列に時間の連続性があると考えていたことを示唆する点である。ただ、それはプリンス 1978 論文の“Time as change”に記述されていて、“Perceived time”で記述されたものではない。プリンスが認識された時間という項目を立てたことは 1971 論文以降に主観的時間を意識するようになったことを示しているが、その記述内容はカレン

ダーや時計など年月日といった時間の計測、時間を特定する手段などとどまっていた。

二つ目は現在を瞬間ととらえていることである。時間の系列が②では「時間が直線的な進行として視覚化されるならば」と時間の図形化を条件文として記述したが、⑤では現在を瞬間ととらえることを肯定した文になっている。また、仮に現在という時間が瞬間であることを認めると、現在と過去はほとんど区別ができず、また予測不可能な未来(⑦)はたちまちのうちに現実化し、過去になってしまうことになる。未来が予測不可能なことは認めることができるが、瞬時に移行するものならば過去・現在・未来の区別そのものが意味を失うことになろう。

⑥の「夜の静けさ(静止)の中で」と始まるこの文は、以下の文と対を成して一つの意味を表現している。

In space, the same distance separates two places whether one be the destination or the point of origin, but in time, a traveller will be older and more fatigued when he reaches the destination than when he set out, and the whole world will have changed a little in the course of the journey.

(目的地か出発地かを問わず、同じ距離で2つの場所が隔てられている空間において、時間の経過とともに、旅行者は出発時よりも目的地に到着した方が年を取り、疲れやすくなり、旅の途中で少し世界全体は変化している。)<sup>34)</sup>

“stillness of the night”を文字通りに理解することも可能であろうが、目に見えない、あるいは一見何事も静止したような状態を表現

していると理解すれば、時間的にも空間的にも止むことなく変化が続くことを表現した文と理解することができる。それは意味の点で②の後半部分と同じである。

第三章では地理的事象の変化のプロセスを説明する理論的なモデルの研究とその説明を行っており、時間の変化はプロセスという語の中に回収されて、モデルにおける時間についてプリンスはとくに触れていない。しかし、数学的モデルであれば、そこの時間は機械的に進行し、等質的な絶対時間に類比的な時間であると言えよう。

以上のように 1971 論文および関連論文に記述された時間は瞬間の連続であること、過去から未来に向けて一方向に（不可逆的に）現在という瞬間の連続であること、過去はすでにないため完全な復元は難しく、未来は予測不可能であること、またそれを歴史に置き換えれば歴史の一回性を認め、歴史的出来事は時間的にも空間的にも唯一の出来事であること、などを特徴とするものである。論理的な矛盾も見られるが、それらはプリンス個人の見解というより 20 世紀前半から 1970 年頃にかけての時間に対する理解の型であったと思われる。

#### IV. 経験的時間と歴史的現在

##### (1) 経験的時間の構成

1971 論文を出発点にして前章で論じた時間は、事象あるいは出来事の変化 (change) を含意する前後関係、時間の連続性を表現する過去・現在・未来、そして絶対時間に類比的な時間の三つであった。しかし、そこには主観的な時間の欠如という大きな問題点がある。その問題点は過去・現在・未来を主観的

な時間（認識される時間）としてとらえ直すことで解消される。さらに、出来事の時間的前後関係、カレンダーや時計といったものまで視野に入れた時、思い起こされるのはマクタガートの時間論である<sup>35)</sup>。

管見の限りでは、マクタガートの時間論に触れた地理学文献は未見である。そこで、その要点を簡潔に紹介しておきたい。マクタガートはまず時間を二つの系列、すなわち過去・現在・未来と連なる位置の系列 (A 系列)、より前・より後という位置の系列 (B 系列) に分け、どちらが本質的な時間なのかという問いを立てる。例えば出来事 N がより前、出来事 O がより後に位置づけられた時、N と O の前後という位置関係（順序関係）は維持され続けるため、B 系列には変化が認められない。したがって、B 系列は A 系列なしに変化を語ることはできず、A 系列が時間の本質であるという結論に至る。しかし、マクタガートは A 系列に論理的な矛盾があることを指摘して、新たに C 系列を設定する。A・B 二つの系列が時間的なもの（変化があるもの）であるのに対して C 系列は時間的なものではなく、ただ順序だけがある。それは、例えばカレンダーに印刷された数字の列、時計の文字盤などである。その C 系列が時間になるためには変化と一方向性が必要であり、C 系列はより前・より後の関係が加えられることで B 系列になるが、A 系列と結合することで十分に時間になる、と主張したのである。

哲学的な議論では C 系列はもちろん時間とは認められず、A・B 両系列のいずれが本質的なのかという点や A 系列には矛盾があるというマクタガートの主張に対する反駁に関心が集中してきた。しかし、筆者の関心はそこではなく、A 系列と C 系列の結合が経

験的時間の表現になることである。A 系列はどの時点も現在としても成り立つ時間系列である。それはより前・より後という B 系列も同じである。このことは A 系列・B 系列が人間の日常的な時間経験の中に確かな位置をもっていないことを示している。プリンスは 1978 論文の中で “Where there is change there is motion, and to register motion we need some fixed reference points.” (変化がある場所には動きがあり、動きを記録するためには、いくつかの固定基準点が必要である)<sup>36)</sup> と述べたが、その複数の基準点、あるいは座標、ニュートンの言葉を借りれば「相対的な尺度」<sup>37)</sup> が C 系列に与えられた役割である。

C 系列は特定の時間の位置を測定する座標であるが、それが A 系列と結合して時間としての機能をもった時、C 系列は重要な社会的役割を負うことになる。1714 年という西暦年や元号を用いた時間表記等は表記方法を共有することによって、それぞれの集団に時間の共有を可能にする。さらに、ある出来事が共有された時間のなかの特定時点に位置づけられた時、歴史年表のようにその時点に起きた出来事もまた共有可能になる<sup>38)</sup>。本稿では一般的な理解にしたがって過去・現在・未来を主観的に認識される時間とするが、それと C 系列が結合した時、C 系列は特定の時間の表記法を共有する集団が時間とそれに結び付けられた出来事を共有するための装置になるのである。

以上、過去・現在・未来を主観的に認識される時間と読み替え、それと結合する C 系列が経験的世界の時間として必要であることが明らかになった。しかし、それでも十分とは言えない。なぜなら、前章 (2) で触れた⑥の “In the stillness of the night the passage of

time is not uneventful.” に関わる問題が残っているためである。この一文を目に見えない状態、あるいは静止的な状態でも変化は止むことがないと理解してよいのであれば、現在において人間が認識可能な範囲の外に時間があることを認めなければならないことになる。

## (2) 過去・現在・未来をめぐる問題

過去・現在・未来という時間に関してさしあたり検討を要する問題が二つある。その一つは時間の前後関係に関するものであり、二つ目は「歴史的現在」をめぐる問題である。

過去・現在・未来は、現在より前に現在であった時間・現在・現在より後に現在となるだろう時間、と置き換えることが可能である。つまり、過去・現在・未来にはそれぞれの間に前後関係が含まれている。それを具体的な出来事と関係づけてみると、まだ無い現在である未来の出来事は想像・予測の範囲を出ず、実在していない。また、すでに無い現在である過去の出来事は既に消滅して実在しない。そう考えると、実在するのは現在とその時点における出来事だけになる。それは、過去と未来は現在なしには分節できず、過去は現在において再構成されるという考え方 (現在中心主義) につながっていく。一方、前章 (2) ③の “An inference is drawn post hoc propter hoc that later events are caused by earlier events.” は過去 (より前) の出来事が現在 (より後) の出来事を規定するという因果的な考え方であり、過去がなければ現在もないという考え方 (過去中心主義) が導き出せる<sup>39)</sup>。しかし、筆者はすでに未来の非実在性を認めており、現在中心主義を採用することになる。なぜなら、過去のある時点が現在である時、未来のある時点に位置していた現在を予測することは不可能だからである。

二つ目の「歴史的現在」とはかつてマッキンダー (H. Mackinder) が文学的な修辞法を借りて使用した時間表現である。文学で言う歴史的現在とは、過去時制の叙述の間に現在時制の叙述をはさみ込むことで出来事が今起きているかのように描写する方法である<sup>40)</sup>。その歴史的現在の研究について、1971 論文は過去のある時点で存在していた現在における空間配置の因果的な相互依存関係を研究するものと説明し、一方で歴史的現在を“single cross-section”とし、また映画フィルムから切り取った一つのフレームにたとえ、瞬間、時間の静止とみなしている<sup>41)</sup>。これは“process of change”の研究を指向する歴史地理学者に共通する主張であったと思われる<sup>42)</sup>。

しかし、現在=瞬間=時間の静止という考え方には二つの矛盾がある。その一つはすでに述べた現在=瞬間に含まれる矛盾である。他の一つは瞬間=時間の静止に含まれる矛盾である。“process of change”は変化がある所に時間があることを前提にしている。この前提に基づけば静止した時間に変化は認められず、したがって瞬間は時間とさえ言うことができない。そこで、あらためてマッキンダーの説明に立ち戻っておきたい。

① Mackinder H. (1930)<sup>43)</sup>

Pure geography is a study of present, an analysis and imaginative recombination of a dynamic system.....It involves what the literary people call the historic present. The historical geographer seeks to restore imaginatively the dynamic system of some past moment of time, say, the height of the Roman Empire.

(純粋な地理学は現在の研究であり、動的システムに関する分析、および想像的な再構成の研究である。…それは、文学者が歴史的現在と呼ぶものを含んでいる。歴史地理学者は、過去のある時期、たとえばローマ帝国最盛期の動的システムを想像力豊かに復原しようとしている。)

② Mackinder H. (1931)<sup>44)</sup>

Geography should, as I see it, be a physiological and anatomical study rather than a study in development. As its name implies, it should be a description with causal relations in a dynamic rather than genetic sense. But there is a true historical geography, a study of the historical present, an idea and expression familiar to all literary folk. In that case the geographer has to try and put himself back into the present that existed, let us say, one thousand or two thousand years ago; he has got to think of the geography of that time complete; he has to try and restore it.

(地理学は、私が見るには、発達の研究ではなく、生理学的および解剖学的研究であるべきである。その名前が示すように、それは発生論的意味ではなく、動的な意味での因果関係を伴う説明でなければならない。しかし、真の歴史地理学、すなわちすべての文学者によく知られている着想・表現である歴史的現在の研究がある。その場合、地理学者は、例えば1000年または2000年前に存在していた現在に立ち戻ろうとしなければならない。そのうえで地理学者はその時の完全な地理を考え、その復原を試みなければならない。)

①・②は、発生論的な研究を歴史学の範疇とし、空間を叙述することが地理学の役割であるというマッキンダーの立場を表明したものである。①で注目されることは歴史的現在の時間設定として“the height of the Roman Empire”（ローマ帝国最盛期）を例に挙げたことである。ローマ帝国最盛期はローマ帝国最大の地理的版図を達成した時点、政治的に安定した5賢帝時代などさまざまに規定できるが、それによって時間の幅も異なってくる。しかし、ローマ帝国最盛期を映画フィルムの一フレームと同様の瞬間と理解することは決していない。

また、②では“a description with causal relations in a dynamic”という記述に注意を向けるべきだろう。マッキンダーが言う因果関係とは機能的な相互作用関係と理解されるが、そこに時間的要素を認めるならば、ヒューム的なそれではなく<sup>45)</sup>、前後関係になろう。また、マッキンダーはプリンスの歴史的現在研究の説明にはないdynamicという語を①・②の短い文章の中で三度使っている。dynamicという語は1971論文で8回使われ、そのうち3回は第I章第3節で、残りの5回が第III章である。第I章第3節がreal worldsにおけるプロセス研究の必要性を述べた部分であったことから、プリンスはdynamicをプロセスに関わる語として、歴史的現在研究からの当該語句の削除を含めて、意識的に用いていたことになる。dynamicという語は絶え間ない変化や諸作用を含意しており、因果関係とともに時間的な要素を含む表現である。したがって、安易に歴史的現在研究を静止的とみなすことはできない。

また、②の“the geographer has to try and put himself back into the present that existed”

では出来事が起きているその時、その場に歴史地理学者が立ち戻ることを求めている。この時にマッキンダーが考えていたことは、その時その場所の地理の完璧な復原を行い、それに基づいて過去の地理を生理学的、解剖学的に分析し、因果的な関係を含む空間配置の相互依存関係を考察することであろう。過去の地理を完璧に復原することが不可能であることは言うまでもないが、本稿にとって重要なことはマッキンダーの歴史的現在とはreal worldsの時間であったという点である。マッキンダーは歴史的現在を主観的な時間とは考えていなかったのである。

### (3) 経験的時間による歴史地理学研究の可能性

以上のようにマッキンダーやプリンスらは彼ら自身や過去のある時点あるいは時期に生きた人々の時間的位置を現在としながら、過去・現在・未来を連続する時間の部分のように理解していた。しかし、プリンスらはimagined worldsの研究の重要性を理解していた。1971論文第II章において、“The ways in which people at different times have seen their surroundings, the ways in which they have assessed their value, and the ways in which they have made and remade landscape features reflect diverse, often conflicting motives, attitudes and tastes.”（さまざまな時期に人々が周囲を見る方法、彼らがそれらの価値を評価した方法、そして彼らが景観の特徴を作り、作り直した方法は多様で、しばしば相反する動機、態度、好みを反映している。）<sup>46)</sup>、また“A study of past behavioural environments provides a key to understanding past actions, explaining why changes were made in the landscape.”（過去の行動環境の研

究は、過去の行動を理解するための鍵を提供し、景観に変更が加えられた理由を説明する。)47) と述べている。こうした研究を進めるためには認識された地理的環境という空間的側面にとどまっていたは不十分であろう。現代においては過去・現在・未来が主観的な、認識された時間であることは広く理解されている。マッキンダーが言った歴史的現在を主観的時間としてとらえ直して Mackinder (1931) の “try and put himself back into the present that existed” を再解釈すれば、それはプリンスらの *imagined worlds* に限りなく接近することになる。

かつてダービー (Darby) は景観を構成する諸要素のそれぞれで変化するリズムが異なることに注意を向けたが48)、ダービーの視線は外的世界に限られていた。しかし、その外的世界を理解するために *imagined worlds* を知ることが欠かせないことは疑いないことであろう。その *imagined worlds* とは、形状・性質、変化のリズムなどさまざまな違いをもつ諸要素全体を一つの像としてとらえ、要素ごとに異なる変化を自らが体験する時間の中に位置づけて理解し、内的には現在において過去と未来を分節し、過去を再構成して現状を理解するとともに、それに基づいて未来に投企することを繰り返してきた世界である。それをプロセスという語で表現することの適否はさておき、マッキンダーが言った歴史的現在を主観的な、認識された時間に置き換えて解釈し直すことで、プリンスが抽象的世界の研究に期待して触れることがなかった、実在的世界と認識された世界が協働する経験的世界におけるプロセス研究の可能性というものが開けてくるのではないかと思われる。

## V. おわりに

歴史地理学は、歴史時間における出来事を考察対象としながら、時間について十分な議論のないままに研究の蓄積を進めてきた。本稿ではライブニッツやカントらの観念的時間概念に代わってマクタガートの時間論を取り上げ、経験的世界における時間の構成を考え、歴史的現在の研究に時間を組み込むことで、経験的世界におけるプロセス研究への可能性を求めてその入り口を探してきた。筆者はそれを *imagined worlds* に時間要素を導入する点に求めたが、人間の認識可能な範囲は限られている。この点は十分に留意しておくべきであろう。

本稿における検討は、時間概念の哲学的記述など筆者の専門を超える部分があり、それを含めて不十分な点を多々抱えている。また、時間を組み込んだ歴史的現在と再構成された過去、投企の繰り返しといったものを具体化する叙述方法についても全く触れることができていない。これらの課題については、今後にあらためて考えてみたい。

〔謝辞〕本稿は2019年度佛教大学教育職員研修における成果の一部です。研修にあたりお世話になった佛教大学学術支援課、立命館大学衣笠総合研究機構の皆さま、また立命館大学地理学教室の先生方に、末筆ながら謝意を表します。

## 注

- 1) Prince, H. C. (1971) Three realms of historical geography, in Board C. eds. *Progress in Geography*, 3, EDWARD ARNOLD, pp. 4-86.
- 2) Alan R. H. Baker, A. R. H., Robin A. Butlin, A. D. M. Phillips, H. C. Prince (1969) The Future of the Past, *Area*, 4, pp. 46-51.
- 3) Prince, H. C. (1969) Progress in historical geography, in Cooke, R. U. eds *Trend in Geography*,

- Pergamon Press, pp. 110-122.
- 4) 菊地利夫 (1977) 『歴史地理学方法論』、大明堂、110-164 頁。なお、本書は一部改稿され、1987 年に『新訂 歴史地理学方法論』としても刊行されている。
  - 5) 有蘭正一郎 (他 5 名と編著) (2001) 『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、4-6 頁。および 152-249 頁。溝口常俊 (2006) 「近世社会と空間」、水内俊雄編『シリーズ人文地理学 8 歴史と空間』、朝倉書店、40-66 頁。山村亜希 (2009) 「今に生きる過去の景観」、竹内克行・大城直樹・梶田真・山村亜希編『人文地理学』、ミネルヴァ書房、182-183 頁。
  - 6) 前掲 1)、p. 4.
  - 7) 前掲 1)、p. 21. Baker, A. R. H. (1972) *Historical Geography in Britain*, in *Baker A. R. H. ed. Progress in Historical Geography*, David & Charles, pp. 107-108.
  - 8) ダービー H. C. (1968) 「歴史地理学」、フィンバーグ、H. P. R. (市川承八郎他訳) 『歴史へのアプローチ (創文社歴史学叢書)』、創文社、195-235 頁。なお、原著は 1962 年刊。
  - 9) 前掲 2)、pp. 54-55.
  - 10) 前掲 2)、p. 49.
  - 11) 前掲 3)、pp. 110-111, pp. 114-118.
  - 12) 前掲 1)、p. 44.
  - 13) 前掲 1)、p. 24.
  - 14) 前掲 1)、p. 24.
  - 15) 前掲 1)、p. 24.
  - 16) 前掲 1)、p. 44.
  - 17) 前掲 1)、p. 45.
  - 18) 前掲 2)、p. 49.
  - 19) 前掲 3)、p. 116.
  - 20) 前掲 4)、95-97 頁。
  - 21) 例えば、前掲 4)、95-97 頁では相対時間を客観的時間と知覚的時間に分け、さらに両時間を細かに分類して説明し、E. ホールは多様な文化的時間を取り上げている (E. ホール (宇波彰訳) (1986) 『文化としての時間』、TBS ブリタニカ。)
  - 22) Leibniz, G. W. (西谷裕作他訳) 『ライプニッツ著作集 9 後期哲学』、工作舎、120 頁。
  - 23) Leibniz, G. W. (原亨吉他訳) 『ライプニッツ著作集 2 数学論・数学』、工作舎、68 頁。
  - 24) 前掲 22)、351-352 頁。
  - 25) 前掲 22)、353 頁。
  - 26) 前掲 23)、68 頁。
  - 27) 前掲 22)、349 頁。
  - 28) Prince, H. (1978) *Time and Historical Geography*, in Tommy Carlstein eds. *Making Sense of Time*, EDWARD ARNOLD, pp. 17-37.
  - 29) Daniel Rosenberg and Anthony Grafton (2010) *Cartographies of Time*. Princeton Architectural Press.
  - 30) 前掲 1)、p. 9.
  - 31) 前掲 1)、p. 11.
  - 32) 前掲 1)、p. 11.
  - 33) 前掲 28)、p. 18.
  - 34) 前掲 28)、p. 21.
  - 35) John Ellis McTaggart (1908) *The Unreality of Time*, *Mind*, 17, pp. 456-474. なお、本論文には邦訳がある (ジョン・エリス・マクタガート (永井均訳) (2017) 『時間の非実在性 (講談社学術文庫)』、講談社)。
  - 36) 前掲 28)、p. 21.
  - 37) アイザック・ニュートン (中野猿人訳) (1977) 『プリンシピア』、講談社、21 頁。
  - 38) 佐藤正幸 (2004) 『歴史認識の時空』知泉書館、102-104 頁。
  - 39) 中島義道 (1996) 『「時間」を哲学する (講談社現代新書)』、講談社、81-131 頁。
  - 40) 都竹恵子 (2018) 「英語における “Historical Present” と日本語表現における “歴史的現在” の比較」、佛教大学英文学論集 18、103-108 頁。
  - 41) 前掲 1)、p. 9.
  - 42) 例えば、日本において小牧實繁が提唱した「時の断面」研究 (『岩波講座地理学 歴史地理学』) に対して、藤岡謙二郎は「静止的」と批判して歴史的研究 (景観変遷史) を指向した (『景観変遷史の性格覚書』)。また、谷岡武雄は歴史地理学を「歴史的現在における景観または地域の復原と、そこから現在に至る景観または地域の発達史 (変遷史) に関する地理学の一分野」 (『平野の地理』) と規定している。
  - 43) Mackinder, H. (1930) *The Content of Philosophical Geography*, in eds. *International Geographical Congress, Cambridge, 1928, report of proceedings*. Cambridge University Press, p. 310.
  - 44) Mackinder, H. (1931) Discussion, *Geographical Journal*, 78-3, p. 268.
  - 45) ヒューム (D. Hume) の因果論は原因と結果の同時性を主張している。
  - 46) 前掲 1)、p. 32.
  - 47) 前掲 1)、p. 44.
  - 48) Darby, H. C. (1953) *On the relations of Geography and History*, *Transactions and Papers (Institute of British Geographers)*, 19, pp. 5-6.